

# 話に聞いた近藤勇

三田村鳶魚

この頃はなんだ人間がはやるので、その一人は唐人お吉という淫売女、早く外国人に春を鬻<sup>ひき</sup>いだということが景物になつてゐる。売淫が景物になるような人間は、あまり披露されては迷惑であります。が、これは別にお話し申すこととして、それとともに持て囃<sup>はく</sup>されている近藤勇、これは淫売を景物にするほどではないが、決して立派な代物ではない。近藤については、別段調べたのではありませんが、かねて聞いておりますところによつて、その人柄のおおよそは知れています。

新徴組<sup>しんちようぐみ</sup>と申すのは、文久三年の五月からの名前で、その前には浪士取扱<sup>うり</sup>というものに属しておつたのであります。これは清河八郎が画策して出来た浪人団体であります。して、前年の十二月に、小川町の講武所、それが後に筋違外へ移りまして、近い頃まで芸者屋などがありました。明治の中頃には、講武所芸者といつて、ちょっと知られてもおりました。まだそこへ移りません小川町に講武所がありました時に、幕府は諸家の家来及び浪人で、武芸のあるものを召集して、この講武所の教官にしたのであります。幕府が浪人を採用することは、まことに久しぶりのことでありまして、江戸入部以後、これほど大きく浪人召集の手をひろげたことはなかつたであります。もつとも徳川氏が江戸へ入つて来ました時分には、随分多くの浪人を採用しておりました

が、その後はほとんど浪人を採用することはなかつたと申していいくらいであります。

その講武所の師範役になりました一人に、越後少将忠輝の末孫で、三州長沢に無高で引つ込んでおりました松平主税介ちからひのすけという人がありました。この人は名を信敏と申しまして、徳川家の立派な親類筋であつたのですが、例の越後騒動以来、本国の片隅に引っ込んでいなければならぬような境遇にあつたのが、武芸を申し立てて講武所の師範役になつたのであります。その主税介を清河八郎が説いて、説き落した。そこで主税介は本供で登城いたしました。無高ではありましたが、大名の格式を持つておりますから、主税介は仰々しい様子で本丸へ乗り込んだ。そうして老中に面会を求めましたので、板倉周防守が出てこれに会いました。何しろ国家の一大事というのでありますから、一応聴き取らなければなりません。その要旨は、浪士があばれて、とかく世間が騒がしい。それには浪士を浪士としておくからいけないので、これを集めて幕府の管轄の下において、そうして諸方から来る浪人どもを制御することにしたらいいだろう、その仕事は不肖ながら、かく申し立てるところの、自分がお引受け致そうということでありました。

幕閣の上席におりました板倉周防守は、この人が後に江戸城を引き渡した人であり

ますが、当時の権力者でありました。当時の浪士騒ぎというのは、今日で申しましたら、まあ暴力団とでも申していいのでしょうか。ですからこっちにも浪士を集めて、あればっこをさせればいい。暴をもつて暴を制するというやつで、御用の暴力団を作ることがおもしろかろうというように考えましたから、早速これを聴き届けました。それからその趣を主税介が清河に伝えましたから、清河はすぐ浪士募集に着手しました。けれども清河といったところが、浪人者でありますから、信用が乏しいために、何分しかるべきものは集まつてまいりません。けれども集まらないといつては、話にならない。折角の仕事もそれで壊れるのですから、何でも構わないから沢山集めるがいいということで、種々雑多なものを搔き集めて、そうして二百人以上集めることができました。

自体、浪人という言葉と、浪士という言葉とが違つてゐる通りに、これは同じではないのであります。浪人と申せば失業者・失職者のことでありますし、百姓でも町人でも、それに構いはないのであります。浪士と申すと、扶持離れの侍でなければならぬ。ただぶらぶらしているものということではない。この差別は、幕末においては、ほとんど滅茶苦茶になつておりますし、誰でも構わぬ刀をさして、浪人ともいえ

ば浪士ともいうありさまであつたのです。清河が集めた浪士と申したところが、やはり浪士・浪人の区別はないので、百姓もあれば神主もあり、博奕打ばくちうちもある。小泥坊さえあつたのです。従来刀をさしていなかつた者どもが、この募集に応じて、はじめて刀をさすというものも大分ありました。清河八郎はその発頭人でしたが、その人も武士ではなくつて、奥州の百姓の子がありました。ですから藩というような足溜りもなく、殿様という背景もないのです。志を当世にほしいままにしようとしてもやり方がない。そこで幕府を道具にして、自分の考えを世の中に行おうという腹なのです。それからまた、当時尊王攘夷論、これは幕臣のうちにも、諸大名の手を借りずには幕府自身攘夷を決行すれば、それでよろしいのである。そうすれば何も諸大名から騒がれるようなことはない。幕府の当局があまり因循姑息だから攘夷が出来ないのだ、と考えているものもありました。そういう機会でありますから、清河は攘夷論をもつて、幕府側に割り込んでゆこうとする。幕臣のうちにも、幕府に攘夷を決行させようという心持のある際でありますから、清河が割り込んできても、自分の考え方と同じもののように思う者もあつた。清河の内心は、それとは違つておるのでありますけれども、分量は少うございましたらうが、幕臣中にも多少清河に同情するものもなくはな

かつたのであります。

しかし清河は風雲児であります。意氣の盛んな、功名心の高いものではありましたけれども、生きんがための勤王党、生きんがための佐幕党というようなものとは違つてゐる。腹をよくするためなら、何でも食う、物食いのいい人間どもとは、一緒になりません。大変に策略を用いますから、清河の人格を疑うことがないでもないが、しかしまだその策略に腐心する彼の心持から申せば、穢いものではないということが知れないこともあります。しかしここに集められたものは、そういうこととは全く懸り合いのないものであつて、随分物食いのいいのもいたのであります。糾合されたところの浪人等は、軍用金の調達をするといつて、随分市中を荒しました。そうしてその取締りというものは、もうなかなか松平主税介には出来ません。本尊様の主税介は置物になつて、働き手の清河が表に出るのみならず、末派末流が無法なことを働く、その始末も立たなくなりましたから、そこで主税介をやめて、浪士取締りとして、鵜殿民部少輔・中条金之助・山岡鉄太郎・松岡万などというものを任命して、浪士団を統率するよう以致しました。

この時丁度家茂将軍の御上洛がありました。これは文久三年の二月に出発されるの

であります。その御警衛というわけで、浪士等は鵜殿民部少輔以下の人々に率いられて、中山道を先発したのであります。それはその当時と致しましては、江戸で浪人があられるということよりも、京都にいる浪人どもがあられる。西国九州から出て来た浪人等があられる。お公家様をおどかしたり、幕府の有司をおどかしたりして、始末がつかない。そこで関東で浪士を募集して、御用の暴力団を拵え対抗させる。これは板倉周防守が、主税介の申立てを聞いた時に思いついたことだつたので、それを実行しました。しかし出発を命ぜられたところの浪人達というものは、沢山お手当を貰えることと思つていたところが、ほんの旅費だけだつたので、衣服や大小を新調した、その払いさえ出来ません。いずれ御用が済んで帰つて来てから払う、というわけで、借り倒して江戸を立つた。そうして上京を致しましたが、御所のうちに新しく建てられました学問所、これへ建言するというわけで、清河八郎等が出かけて行く。どうして、西国九州から来ている浪士を防ぐどころでなく、幕府は自分で集めた浪士を持て余すありさまになつた。京都でこの手合が攘夷論を煽るのですから、幕府は非常に迷惑しました。この時あたかも島津三郎が生麦で外国人を斬りまして、大騒動が起つたので、这一件は随分危険などころまで進行しておつたので、江戸の状況も甚

だ心配されるようなありさまになつた。そこで江戸の人心が洶々たる様子もあり、こ  
こを付け込んで不逞の徒が跳梁する。これを鎮撫させるという名義を拵えて、御用の  
暴力団を江戸へ返しました。それから帰つて来た人達というものは、攘夷の先鋒を承つ  
たなどといつて大威張りで、なかなかの騒動をやつたのであります。が、近藤勇はここ  
までで、この御用の暴力団との関係が一きりになるのであります。

近藤の舞台は京都であります。ここで大変な評判の男になれたのである。一体は  
清河の募集に応じて出て來た人間でありますけれども、教授方とか、組頭とかいう位  
置についたのであります。全く一兵卒の位置で、新見錦しんみにしきという人の手に屬しておつ  
た。清河八郎に最も近かつた数人を除けば、いずれも腹の減つた、物食いのいいやつ  
が多いので、皆佑らん哉の人間どもでありますから、そこからいえば、近藤だつて  
も悪くもいわれない。近藤は京都にまいりまして間もなく、京都守護職であつた会津  
侯と結託して、芹沢鴨せりざわかも・土方歳三ひじかたとしざう等数人と一団になつて、清河等と分離しまして、京  
都に居残つたのであります。これは近藤一人では、なかなか京都に踏みとどまるの、  
分離するのということがうまくゆきませんから、頭立つていますところの芹沢を担い  
で、それをお頭にして、数人踏みとどまるというよなことになつたのであります。が、

そうきまるというと、この芹沢という者を近藤の手で暗殺してしまった。芹沢という人は、随分素行のよくない人であつたといいますけれども、別に分離後に素行が悪くなつたのではない、前から悪いのであります。都合のいい時は、素行が悪くても大将に押し立てるし、都合によつては素行を論じて排斥の理由ともし、それだけではまだ不十分なので、ついに暗殺する。かなり陰険な働きをするものである。

さて最初は十二三人があつたのが、後には百人余りになつて、壬生浪士といわれております。これが新選組ということになつて、近藤はそのお頭になつたのであります。この手際の最もよかつたことは、三月の三日に清河等が江戸へ帰りますと、七八日たつた十日の日には、所司代に属することになつて、新選組という名前も出来た。これは、会津侯は前月すでに、「在京有志の徒にして、主家なきものを守護職に属せしむる」ということを申し立ててもおりますし、のみならず、この前後に浪人を懷柔することについて、ちつとも油断なくやつておられたのでありますから、江戸から御用の暴力団が来るということを聞くと、直ちにこれを物色して、得意の懷柔手段を用いられたということは、十分想像することが出来ます。会津に属することが決定したから、近藤等は京都に踏みとどまることにしたのでもありますし、踏み止まるこ

とが出来たのでもあります。それが幾日もたたぬうちに、新選組というものになつた。こちらの手際といふものは、實に巧妙なものである。自体近藤といふものは、小才の利く男でありますて、妥協とか、折合とかいうようなことは、最も得意な人だつたのです。

それでは会津藩が近藤を用いて、どういう効能があつたかといふと、会津の人達は、近藤がしきりに薩長その他の秘事を内通して来るのを褒めた。探偵の技量のえらいことを感心している。探偵の上手な人間などといふものは、明るい人間ではない。影の暗い人でなければならぬ。そうしてそれにはまことに相応した暗殺上手である。随分沢山人を斬つている、といふその一面には、会津に上手な使い手があつて、近藤等を煽動し、使嗾しそうしてうまく働かせた。それだから、あれだけの男があれだけに売れるような働きが出来たのであります。近藤は決して晴れ晴れした、近頃皆が喜ぶチャンバラなどといふような、あつさりした、あどけないようなわけの人間じやない。もつと粘りつ氣のある、毒々しいところのある人間なのであります。

彼が人を多く斬つて世間から注目された蛤御門の合戦、これは御築地の陰のところに隠れては、行き過ぎる敵をうしろから斬つては、またもとの位置に隠れている。そ

うしてまた敵の行き過ぎるのを見ては、そこから出て斬った。それから三条小橋の升屋喜右衛門のところに、西国筋の浪士が五六十人もおりますところへ、二十人ばかりで押しかけて行つて、そのうち七人を斬つて、追い飛ばしてしまつたなどということは、人におぼえられている仕事だつたのであります。近藤の人を斬つたのに、前から斬つたのは一つもない。必ずうしろから斬つてゐる。御築地の陰から出て斬るとか、隣座敷へ呼び出して斬るとか、二階から呼びおろして斬るとかいう行き方をする。いずれにも人を沢山斬つたなどというと、剣術の腕前の凄じいようと思うものもあります。しかし、彼の剣道は決して立派なものではない。私の祖父は剣術が好きであります。近藤とも立ち合つたことがあるといつて、よく近藤の剣術の話をしました。ナニあれば強くはない、しかいかにも粘つた剣術であつた、三本に一本は取れる、と申しております。私の祖父なるものは、びっくり仰天するだけの人間であつて、真剣なんぞを持つて斬り合うなんていう肚胸のある人間ではありませんから、何のお話もないが、竹刀を持つて立ち合つてみても、その人の根性が出ないことはありません。私の大伯父になります谷合量平というものがございまして、それも近藤の剣術の話を致しましたが、やはり祖父が申すのと違つております。先日新徴組の一人であります

した千葉弥一郎さんから承りますのに、近藤の剣術はさまでのものじやない、ということを言つておられました。そういうふうでありますから、近藤が剣術の道場を持つておつたなどという話は、私は聞いていない。とても剣道の指南などをするほどの腕前があつた人ではないのであります。しかし粘っこいだけに、臆面もなく道場を出していらないともいわれない。明治の初めに、漢学教授・英学教授の看板を出しておりましたのが、皆学者かといえば、そうじやない。時の流行だから、随分怪しいのが多かつた。近藤が道場を持つていたとしたところが、そういうわけでありましたらば、それが立派な剣客であつたという早呑込みをしては、大きな間違いが出来るだろうと思ひます。

それからまた近藤は、決して一人で出歩かない。必ず数人の同行者がなければならなかつた。これは用心深いためでありますたろうか。彼は当時京都に大勢力のある会津侯に取りついて、会津党になつた、あれこそ忠実なる御用の暴力団であります。彼がおだてられて得意に探偵をやるだけでなしに、暗殺を盛んにやりましたために、何程西国九州の連中に幕府を怨ませることをしでかしたか。なかには必ず斬らなければならぬ人でない人までやつておりはしないか、そんなことのわかるような男じやな

い。彼が京都に居残ります時、清河等と別れる場合に何とも言わないで、芹沢にものを言わせて、黙々として手持無沙汰の姿でいたなんていうことは、何と解釈してよろしいか。彼は楯を持たずに戦争に出られない男である。京都におつた時は、立派ない楯があつた。すなわち会津侯であつた。京都から去つて江戸へ来ては、もう前のように働きは出来ない。

殊に滑稽に感ずるのは、彼が明治元年になつて、甲府城を乗つ取るといつて、江戸を出かけた。その時に若年寄の格というので、裏金の陣笠を被つて出かけた。生れ故郷をその<sup>いであち</sup>扮装<sup>いであち</sup>で、いい心持で通過する。ところの者からえらい御馳走を受ける。この時になつてみると、もう若年寄も何もあつたものじやない。幕府はあれどもなきがごとしというありさまなのですから、裏金も裏銀もあつたものじやない。しかるにそれがたいそううれしかつた、というのは、江戸へ帰された後に、浪人取締りが新徴組になつたのですが、それから庄内の酒井左衛門尉に属せしめられた、清河のない後ですから、浪人等もついに庄内侯の家来になつた。清河がいたら、そうはゆきますまい。幕府のきめた新徴組の相場というものはどんなかというと、伊賀者次席というのです。御家人の下級のものです。それですから、新徴組の平の者が二十五両四人扶持、伍長

となりまして二十七両五人扶持、肝煎きもいりというのになつて三十両六人扶持、取締りになつて三十五両七人扶持、こういう俸給なのである。それで唯々として新徴組であるといつていたほど、清河等数人を除けば、ありがたからぬ廉売の代物なのである。それがぶちこわれた幕府にしても、若年寄の格——今日でいえば政務次官か、事務次官か知らないが、ともかく次官というわけで出かけたのですから、近藤はうれしかつたのでしよう。そういうことから考へても、彼の人柄がわからないことはない。そのぶちこわれた幕府でも、それが背景なり、持楯なりで、甲府城を乗つ取つて、上方からの軍勢と戦うという元氣を出せたのであります。御馳走酒に酔つ払つて、もう甲府へ十七里という与瀬というところへまいりました時分に、敵はすでに信州の下諏訪まで来ている。この方は甲府へ十三里しかない。そうしてこの手には、いくさ上手である土佐の板垣退助さんが、兵を率いておられる。そういう内報を受けながら、近藤は疲れているからもう行かれないといつて、与瀬へ泊り込んでしまつた。その翌日は大雪で出行かれないのである。また逗留している。ようやく笛子峠を越した時には、敵はすでに完全に甲府城を占領している。笛子を下りて柏尾というところで戦うようなことになつては、一溜りもあるものではない。わけもなく敗走してしまつた。戦争のことありますか

ら、負けるも勝つもそれはよろしい。負けたからといって、その人間に甲乙がきつと  
つくものではないが、しかし彼の志を見ると、裏金の陣笠がうれしく、御馳走酒に酔つ  
払つて、敵迫れりと報告されても、向つて行けないほどにうれしくなつてしまつては  
しようがない。この方向から見れば、よくその人柄がわかるよう思う。

下らない、つまらない、小才の利く、おだてられれば思いもよらない働きをもする  
というような人間が、何がおもしろくて、この頃持て囁すのか、どこに興味がある  
のか、今日近藤勇をおもしろがつて、皆が楽しむということを見て、我が国の今のあ  
りさまを悲しむのみならず、その心が続いていつたならば、近い将来がどんなである  
かと思うと、まことに悲しみが深い。